

第 15 代 Parham の Willoughby 男爵の Hugh (原文 48 ページ)

世界で一番大きな図書館は大英博物館にある図書館だが、その閲覧室には高さはそれほどでもないが広さについてはセントポール寺院より大きいドームがある。閲覧室の普通の黄褐色の切符では博物館の手書き文書部門の勉強室には入れない。そのためには緑の切符が必要だ。そこには 100 冊ほどの綺麗に書類綴りにまとめられている、とてつもない数の聖職者 William Cole の手書き文書がある。彼の書は最初から最後まで美術そのものだ。それらの大きな本の中に Willoughby 卿に関する文書がある。そして貴族に対する献辞についての前に書いたことを裏付けるように、彼が古物収集家協会の会長だったとき、彼に献じられたフルスカップの紙何枚にもわたる詩を見つけることができる。

ずっと独身であり、深い謙遜の人であった彼は、後に爵位と小さな財産を相続するまでは単なる一兵卒あるいはそのほんの一級上の兵として陸軍で働いた。

「彼はいくつかの貴重な骨董品を古物収集家協会に残した。」彼は 1765 年 1 月に Strand の Craven 大通りの彼の家で亡くなったが、その通りは後に Robert Louis Stevenson により恐ろしい中味の入ったサラトガトランクのロンドンの到着場所として選ばれた。

コメント (27)

この Stevenson はあの「宝島」とか「ジキル博士とハイド氏」(ジキルとハイド)などを書いた有名な作家です。

そのスティーブソンに「新アラビアンナイト」という小説集があります。この中の「自殺クラブ」という話の第二話が「医者とサラトガトランクの話」という話になっていて、アメリカの青年がパリに遊学中、女性にうまいこと騙されて自分の部屋から離れている間にその部屋のベッドに男性の死体が置かれていて、処置に困って同じフロアの医者アドバイスでその死体をトランクに隠し、ロンドンまで運んである家まで届ける。その死体を隠したトランクが「サラトガトランク」という馬鹿でかいトランクで、大の大人が何人かがかりでないと運べないというようなものです。

私は光文社の古典新訳文庫の「新アラビア夜話」というので読みました。

この「新アラビアン・ナイト」は、ボヘミアのフロリゼル王子というのが主人公で活躍するサスペンス調の冒険物語で、19 世紀のロンドとパリを主な舞台にする、なかなか面白い物語です。

Mr. Cole は書いている。「彼は非常に利口な人だったがとても頑迷な長老派の信者だったので、(彼をよく知っており Philemon to Hydaspes の著者である)Cambridge の Magdalen College の Mr. Coventry は彼のことを、「彼はあまりにも誠実だったので、良心のとがめなしには、また偶像崇拜だと思ふことなしには、膝まずいて英国国教会の洗礼を受けることができなかった」と言っている。最初の生命保険会社の社長はこのような偉大な紳士だった。

基金の中核としての預託金 (原文 49 ページ)

1757 年 4 月に(Equitable が)特許状を請願した時の書類には次のように書いてある。

「そのような(保険)証券を発行するにあたり、請願人およびその後継者はその証券を受取る者からさらに預託金を受け取り、資本金あるいは基金とする。その預託金は政府あるいは他の十分安全な場所に預けられ、異常な保険金支払増その他により保険料積立金が不足するときに使われる。請願人は保険料および預託金を確定する用意があり、そう望んでいる。」

この請願がうまく行かなかった時点で、初期費用の拠出者の中から脱落する者が出た。しかし脱落しないで残った、【この目標に心から参加していた人達は、Mr. Mores に対して2回目のヒヤリングの

ために準備して、1回目のヒヤリングで出た反対意見を取り除くように要請した。】

2回目のヒヤリングもうまく行かなかった。というのも主として【このような低い保険料で保険を提供しようとしている以上当然必要となるであろう】基金あるいは資本金について、提案がなかったからだ。

言い換えれば反対は、Equitable が相互組織の生命保険会社であるにもかかわらず、死亡時に確定した額を払うことを約束しようとしたからだ。

1760年4月20日、Law officers of the Crown に提出された3回目の請願で、(さらに数が減ってしまった)基金拠出者は、終身保険あるいは10年以上の期間の定期保険に対して保険金100ポンドあたり3ポンド、1年から10年までの保険期間の定期保険の場合は100ポンドあたり2ポンド、1年定期保険の場合は100ポンドあたり1ポンドの預託金とすることを提案した。

そして彼らは特許状の原案を提出し、また保険料率を提出し、それについての3人の著名な数学者による「保険料率は死亡のリスクに照らして十分に適正である」旨の供述書を提出した(実際の定款では、預託金のレートはその後修正された)。

法務官は特許状を出すことには反対したが、その意見書の中の以下の抜粋は興味深い。

「閣下は以下についてご注意ください。

1. 請願者は現在実際に行なわれているどの会社よりも安い条件で、より長期にわたって保険を引き受けようとしている。そのための保険料率を特定している。
2. 彼らは保険料および全ての加入者より預託される追加的な40シリング(2ポンド)を投資することにより資金を得て、それによりすべての損失を埋め合わせるとしている。そしてさらに安全のために全ての被保険者を会社の会員として、保険料や預託金が不足する場合にはその不足分のうちの自分の割合分を分担する旨の誓約をさせるとしている。...

我々は(ヒアリングに)請願人達の代理人やLondon 保険あるいはRoyal exchange 保険の代理人、人の生命に関するperpetual insurance を行なっているAmicable Society の代理人を参加させたが、これらの会社がこれらの請願に対して反対して手続き停止申請を司法長官に提出したので、我々は閣下に対しこの誓願を受けないようにアドバイスする。

もし請願人達がそれほど成功に確信があるなら、任意のパートナーシップで試してみるという容易な方法がある。そしてもし試してみて彼らの計算が実際の経験に耐えうることがわかったら、その時請願者達は現在単なる見込み計算のみにもとづいてなされているよりもはるかに有利に再度請願することが可能となるだろう...

Amicable Society は非常に狭い底の上に形作られている(注:この部分、狭い底(narrow bottom)という言葉の意味が良くわかりません。)...

2つの大きな会社は特許状を取得するために公衆のために大きな額を払った。我々は王が何人かの人間がはっきりした確からしい公衆のためになるという見込みもなしに単に請求したことのために、それらの会社の権利を侵害することをアドバイスすることはできない...

1761年7月14日火曜日」

しかしながら任意のパートナーシップという貴重なヒントは、精力的でありかつ有能な Mr. Mores がすでに予想していた所であって、その翌日1761年7月15日に、彼は発起人の総会においてすでに彼自身が用意していた定款のドラフトを読み上げた。

そして会社はその定款の1762年9月7日付の修正版のもとに設立された。

その定款によると、保険期間10年未満の定期保険の場合、100ポンドあたり10シリング(0.5

ポンド)、それより長い定期保険および終身保険の場合 100 ポンドあたり1ポンドの預託金が必要とされた。その預託金の主な機能は、会員にこれこれの金額を支払うように、支払が遅れたら(もし会員の誰かがその金額あるいは一部を支払うのを拒否するかあるいは無視した場合)ペナルティーが課されるという支払指令が来た時、指定された金額およびそれに対するペナルティーをそこから供給することであった。

その預託金がそのように使われなかった場合、「契約が終了する時、全ての会員は(死亡による場合は支払うべき保険金に上乗せして)預託金の返還を受ける。」となっていた。

そのため 1765 年 2 月 5 日 Shoreditch の浮き彫り師の George Bowser が、毎週の定例理事会に彼がすでに会社の最初の月に発行を受けた契約で、その後失効してしまった契約に関して請求した時、預託金は即座に彼に返金された。

Bis dat qui cito dat (どうせなら早い方がいい)

コメント (28)

この所、Equitable のスタートにあたって資本金がないことに対して、支払能力をどのように確保するかという非常に面白い話が展開されています。

特許状を貰うことができればその信用で株式を発行し、それを資本金とすることによって支払い能力の問題は解決するのですが、それが出来ない場合どうするかということです。

初期費用の拠出者という表現が出てきますが、これは特許状の請願のための作業に使ってしまっていて、2回か3回にわたる請願が全て却下された段階でもうあまり残っていなかったようです。

そこで生命保険の契約者に保険料とは別に預託金を払ってもらって、それで支払能力を確保しようと考えたようです。

保険料は確定ですし、保険金額も確定です。十分安全をみて保険料率は高目に設定してあるのですが、それでも当時の一般の取扱からすると保険料率が安過ぎると判断されたようです。

それで万一、一時的に死亡保険金の支払が大きくなって収入保険料でまかなえなくなる場合には不足分を契約者全体に負担してもらうために、各契約に不足分を割り振って、その金額を払込んでもらうことにしてありました。払込んでもらったお金は利息を付けて返済するんですが、その払込を確保するために、あらかじめ契約に加入する時に預託金を払っておいてもらうということにしてあったようです。

この預託金も預かっているだけですから、死亡して保険金を払う時、あるいは解約して返戻金を払う時に預託金も合わせて利息を付けて返済されたようです。

議事録や他の文書の行間を読むと、預託金はケルベルス(地獄の門番である)「司法長官および基金がないことについて大騒ぎをしたりした特許会社、および腰抜けの申込人」に対する鼻薬だったんだと確認するに違いない。

創設者達およびアクチュアリーのアドバイザーであった William Mountain, F.R.S. や Richard Price, D.D., F.R.S. 等は、保険料が十分だということについて全く確信していて預託金など必要としなかったのも、初期において預託金を徴収したという記録は、White Lion 居酒屋で承認された最初の 27 件の申込についてだけであり、会社が自社のオフィスに移ってからは預託金に関しては何も書かれていない。

このようにすぐに預託金をやめてしまったのは、1763年に Edward-Row Mores によって提案された内規に合致しており、彼の「Short Account」のいくつかの版に追加されている。その最初の版は 1762年に Equitable が設立された直後に発行されており、実際それは最初の案内書であった。その提案された内規の一つは次のようなものだ。

「さて会社は全ての不必要な負担を免除したいと考えていて、このような預託金はそれが意図した目的に不適當であるので、今後預託金を取り立てる、あるいは支払うことは停止する。」

このようにすぐに使われなくなったが、預託金が正式に廃止されたのは 1770年6月27日の総会であった。19世紀の初めに別の種類の預託金が契約申込の際に求められた。最初の 100ポンドに対して5シリング(0.25ポンド)、それを越える部分について 100ポンドあたり2シリング6ペンス(0.125ポンド)の預託金が求められたが、それは契約の申込の引受を完了させるためのもので、もし1回目の保険料が1太陰月以内に払込まれない場合は、その預託金は没収される。ただし申込が拒絶される時は当然返金される。

IV

入会金 (原文 54 ページ)

William Mosdell とその直後の後継者である James Dodson Junior, John Edwards, John Pocock は今日の意味でのアクチュアリーではなく、実際のところ会計係・記録係であった。

アクチュアリー的な計算は、最初に保険料を計算した James Dodson Senior がすることになっていた。そして彼の報酬は Old Amicable の場合、registrar に対して、最初の 2,000 人のメンバーについて一人あたり5シリング(0.25ポンド)であったように一保険金 100ポンドあたり一時金で5シリング(0.25ポンド)となるはずだった。それは Dodson は終生、毎年 100ポンド受取るはずだったとも書かれている。

1757年に Dodson が死んで会社のマネジメントを引き受けた Edward-Rowe Mores は、この年金が彼自身に支払われるように変更した。それ故多分 Dodson の報酬は保険金 100ポンドあたり5シリング(0.25ポンド)で、100ポンドの最低保証付ということだったんだらう。

コメント (29)

ここで Amicable について registrar という言葉が出てきましたが、これも Equitable の actuary と同様、事務局長というような意味だったようです。それで年収の比較をしているのですが、2,000人×5シリング(0.25ポンド)=500ポンドですから、Amicable の registrar は 2,000人集まった段階で 500ポンドの収入になります。それに対して Equitable の場合、100ポンドの収入になるには、 $100 \div 0.25 = 400$ ですから、保険金 100ポンドの契約を 400件引受ける必要があるということになります。

以下に出てくるのが、当初特許状を取得するための資金(基金)を出してくれた人に対する報酬の問題です。

特許状の請願がなかなかうまく行かず何回も行なったため、初めに集めた基金が足りなくなり、途中で基金の追加をしたのですが、その際追加の払込みをしなかった人は初めの基金拠出に関する権利を放棄したことになって何の報酬も得られなくなりました。追加の拠出をした人は初めの拠出についても報酬を受け、追加の拠出の際新規に拠出者になった人も同じ様に報酬を受取ることになりました。

事業がうまく行かなければ拠出した分、全く返ってこないで丸々損になるリスクを取ったんですから、うまく行ったら拠出者にはその分たっぷり払ってあげても良いようなものですが、その原資は加入者の払込む保険料ですから、あまり多過ぎるのも問題があります。

さらにこの基金拠出者は、理事になっている人もいますが、そうでない人もいて、理事は事業をうまく軌道に乗せるためにあまり多く払いたくないという立場なのに対して理事になっていない人は、できるだけ早くできるだけ多く払ってもらいたいという立場です。その支払の原資となる保険料についても理事や基金拠出者も契約者として保険料を払っているわけですから、利害関係が非常に入りこんでいます。

Equitable の創業期の大きな問題となり、結局の所、実質的な創業者の Edward Rowe Mores がやめてしまう原因ともなった事件のあらましが以下に展開されます。

基金拠出者すなわち金のかかる特許取得のための費用を拠出した人達に返金するための準備金も必要だった。そして彼らのために保険金 100 ポンドあたり 10 シリング(0.5 ポンド)が別途用意された。その後すぐ契約の件数が大きくなりはじめた時明らかになったのは、基金拠出者は投資した額に比べて非常に多くの額を受取るだろう。そして実際受取っているということだった。

Morgan はこの債務について「かかったかも知れない費用に全く釣り合わない支払いだ」と言っていた。とはいえ、これだけでは正当ではない。というのも当初の基金拠出者で1回目2回目の特許取得申請がうまく行かなかった時に拠出者をやめてしまった人達は、払込んだ資金を全部失ってしまったのだから。

だから拠出者を続けていた人、その人達に誘われて新たな資金を拠出した人達は、会社の設立が成功した時は彼らの誠実さに見合ってたっぷりの返金を受けるのは妥当だろう。John Francis を信じてすれば、Old Amicable の場合加入者が払込む年額6ポンド4シリング(6.2 ポンド)のうち、1ポンド4シリング(1.2 ポンド)もの大きな部分が当初の拠出者に支払われたということになるが、Francis はしゃべる言葉はきらめくばかりだが、正確性というとそれほどでもなく、彼のスタイルは *de mortuis nil nisi bonum* (死者の悪口は言わない) というような上品さで拘束されてはいなかった。

このようなわけで合計すると保険金 100 ポンドあたり 15 シリング(0.75 ポンド)の入会手数料が定款に規定され、それは初回保険料の上乗せだったので、会社が相互会社であることと衝突するものではなかった。しかし預託金と同じように、それは White Lion 居酒屋で開かれた6回の毎週の定例理事会で実施されただけで、1762 年 10 月に Nicholas 通りに自社オフィスを持って以降は、会社は入会手数料を保険金 100 ポンドあたり5シリング(0.25 ポンド)に引き下げ、そして「特許状基金所有者」に対する支払いに充てるため保険料をちょっとだけ引上げることにした。

比較すると、終身保険の場合、保険料の引き上げ幅は 100 ポンドにつき1シリング6ペンス(0.075 ポンド)であり、1763 年に Mores が提案した内規(多分原案は 1762 年にできていて、実施日の所には 1763 年は書いてあって、月日の所だけ空けてあったものと思われる)によると、8年以上の保険期間の定期保険の場合は1シリング6ペンス(0.075 ポンド)、6年・7年の定期保険については2シリング(0.1 ポンド)。同様に次第に高くなり、1年の定期保険については 10 シリング(0.5 ポンド)となっていた。

Cornelius Wolford(あるいは半ダースもいた彼の助手かも知れないが)は、彼の書いた保険辞典(Insurance Cyclopædia)の中で何ページにもわたって、新しい会員がこの入会手数料からの「特許状基金保有者」への過剰支払いについて辛らつに反対したことについて書いている。

たとえば、理事のうち特許状基金保有者でもあった人が入会金欲しさで不良な被保険者を正常として引受けたなどという、かなり個人攻撃が行なわれた。これに対して Mr. Mores は(誰でも議事録を精読すればこのような実例をたくさん見ることができる。特に被保険利益に関して)、『もし理事が誤ったとすればそれは用心深過ぎるという方向にだった』と答えた。

実際 1767 年 5 月 8 日以降、特許状基金保有者の持ち分 146 口は新契約の保険金額のいかににかかわらず1口につき 1779 年に終了する2ポンド(これはすぐに1ポンド5シリング(1.25ポンド)に引下げられたが)の確定年金を支払うことで、買い取られることで合意された。

数年にわたるすべての口論は、100 年後にそれについて書いた Wolford にとっては、さらにそれより 2/3 世紀後に我々が思うより2倍もの大きさで見えただろう。